裾野麗峰山の会山行報告書

文・小松眞明　　写真・後藤、掛橋

第３日目

０８月０５日（月・霧～雨）

起床４：００－熊ノ平小屋発５：００－三峰岳６：３０－野呂川越８：４７－独標１０：０５－高望池１０：３５－伊那荒倉岳１０：４９－大仙丈岳１３：３６－仙丈岳１４：１８－仙丈小屋１４：３８（泊）

単純標高差＝上り　熊ノ平小屋約２５５０ｍ～三峰岳２９９９ｍ＝約４４９ｍ
野呂約２３００ｍ～仙丈岳３０３３ｍ＝約７００ｍ
下り　三峰岳２９９９ｍ～野呂川越約２３００ｍ＝約６９９ｍ

早い消灯前に少し遠い外のトイレを済ませ寝袋に潜り込み熟睡モードに、回りの〇〇〇もすぐに子守唄に変わり夜半に降った激しい雨の音も夢の中で確認する。疲労は良く効く睡眠薬であっという間に４：００。霧に包まれた三日目の朝を迎えた。

熊ノ平小屋の美味しい朝食を全てたいらげ小屋の朝夕の食事から期待のお弁当を受け取り、お楽しみを後に残して中身を確認せずにザックの中へ。若干の疲労と雨具を全身にまとい５：００に三峰岳へ向かい熊ノ平小屋を後にした。

尚、小屋は市営と書かれていますが今は東海フォレストの管理とのこと。途中の稜線に出ると雷鳥の親子に出迎えられた、この時期は子育てのシーズンなのだろう雷鳥はキジ目でハイマツ林に生息し南アルプスは雷鳥の世界最南端の生息地で数が減少し絶滅危惧Ａ１類に指定されている。

三峰岳（みぶだけ）６：３０到着。霧で展望は全く無い。Ｌの話では、三峰岳は標高２９９９ｍ。３０００ｍに１ｍ足りないが、ケルンの１ｍを足すと、丁度標高３０００メートルになるそうだ。ここから実質長大な三峰岳～仙丈岳の尾根が始まる。

地図を見るとルートは、頂上から伸びているが霧でハッキリしない。Ｌが右往左往探したら、少し下った所に道標があった。登山道は良く踏まれていて全く問題はない。霧が流れ展望が少し開けた。長大な尾根が野呂川越に向かっていた。その後、天候は回復の兆しが出てきて雨具から解放される。

三峰岳頂上
後ろのケルンが約１ｍ

雷鳥

長大な尾根

三峰岳から野呂川越まで標高差約７００ｍ。時間にして２時間ちょっと。厳しさはないが結構長い印象だった。下から上る何人かに会った。全員昨夜は両俣小屋泊。単独が多かった。北岳・農鳥・塩見と行先は様々。
途中で大きな荷物の若い衆二人に抜かれた。この二人とは結局翌日北沢峠まで前後した。

ようやくの野呂川越着。随分高い所に道標が付いていた。冬はそこまで雪が積もるということか。
ここを冬訪れたのはＬのみ。しかも１９７６年とのこと。果たしてＬの胸に去来するものは？

野呂川越の分岐から伊那荒蔵岳の間の森林帯の中では数多くの高さの異なる倒木の障害物をアスレチックのごとくかわして進む、倒木を越えた数だけ疲れが溜まっていく倒木の原因は密集した森で根と地上に出ている部分とのバランスが崩れた木が暴風及び雪の重みで倒れてしまったものと思われる。

横川岳でお弁当を広げた。楽しみしていたお弁当の中身はおにぎり２個と笹の葉に包まれた白米おこわのきなこまぶしとマグロの佃煮少々プラスおしんこ４枚でした、大変美味しくいただきました。

先ほどの若い衆と前後して上った。若い衆は当初、両俣小屋でテン泊予定だったが情報で高望池に水があることが分かり急遽、そちらに変更したようだ。

標高２４９９ｍの独標では老若男女が数名休んでいた。７５歳くらいの結構年配者がいて驚いた。今回全体的のうだが、すれ違う登山者に年配者が多い。６０歳代では、まだまだ「洟垂れ」か。

高望池を通過し、標高２５１７ｍの伊那荒倉岳着。Ｌはここで旧友にバッタリ会った。まだ富士山測候所があったころ勤務していた御殿場のＮさんだった。スキー仲間のようだ。現在は埼玉の気象庁関係に単身赴任しているそうだ。休暇は９日まで。一人テン泊で足の向くまま、気の向くまま。ちょっと羨ましい感じだった。

旧友Ｎさんと共に

ここから大仙丈岳まで標高差約４５８ｍは長かった。疲れはピーク。ＭさんがＬに頑張って追尾し過ぎて過呼吸になってしまい一時パニック。それからＬの前で先頭を歩き、問題なくなった。

伊那荒倉岳より仙丈岳に向かう。霧により頂上が見え隠れする中、岩陰の可憐な花々を楽しみながら大仙丈岳へ長い登りを続ける。頂上直下で雨が激しさを増した。１３：３６大仙丈岳の頂上。仙丈岳の頂上が幽かに見ることが出来て少し元気が出てくる。

仙丈岳は霧で視界が全く無く素早く記念撮影を済ませ、馬の背ヒュッテから明日の天候の回復を期待して再登するために急遽変更した仙丈小屋に向け下山を開始し、仙丈小屋に１４：３８に到着。

三階の静かな大部屋に落ち着く。仙丈小屋のトイレは一階、水場は１００ｍほど離れているが水量は豊富でした。南アルプスの小屋は水が豊富でとても冷たく美味しい水です。

Ｌの後輩、芦安のＳ氏より生ビヤの差し入れが有り美味しくいただき、ご馳走様でした。明日の天気は微妙な予報と確認して寝床へ。疲労がピークとなる三日目も全員が良く頑張りました。今晩もまた睡眠薬が良く効き消灯前に夢の中へ、夜半に窓の吹き付ける風の音が聞こえたような気がしたが目覚めること無く明日朝を待つことに。

兎菊

粘芒蘭

深山金梅

左上が頂上

仙丈小屋

その他の記述（後藤）

１．熊ノ平小屋は寝袋＋毛布だった。寝袋は案外快適。
２．三峰岳途中で山ヒル？を見た。（写真）
３．伊那荒倉岳で単独の女性で熊本の宮崎さん（ややこしい）に抜かれた。
前後して上り、結局小屋で一緒だった。ただ、お酒はやらず、余り社交的でなかった。
４．小屋の日本酒は「仙醸」。一合５００－で熱燗ＯＫ。
サッパリ系で美味しい。
５．小屋番のＭさんは以前、黒戸尾根七丈小屋にもいたという。ざっくばらんで、フットワークはサイコ―。とても対応のイイ方だった。ここの山小屋の場合、お住まいは伊那市長谷村。
６．雨のＡＬＰＳだったが、思ったより快適に歩ける。皆さんも自信になった。
７．１９７６年の冬の記憶は全くなかった。
８．仙丈岳は過去冬２名で、地蔵尾根～北沢峠～甲斐駒～黒戸尾根もやった。（参考記録）
９．主に観察した花（太字は今回初めての花）
梅鉢草、稚児車、高嶺矢筈母子、**当薬竜胆（とうやくりんどう）**、這松の実、**御蓼（おんたで）**、兎菊、**粘芒蘭（ねばりのぎらん）**、姫小米草、高嶺高輪花、深山金梅、色丹草、峰薄雪草、岩桔梗、千島桔梗、高嶺平江帯（たかねひごたい）、深山男蓬、

深山金梅

深山男蓬

粘芒蘭（ねばりのぎらん）

参考記録＝地蔵尾根～北沢峠～甲斐駒～黒戸尾根

第7期冬山合宿

仙丈岳地蔵尾根

3033m

後藤　隆徳

●仙丈岳地蔵尾根～仙丈岳～北沢峠～甲斐駒ヶ岳～黒戸尾根

▽79年12月30日～80年1月1日

▽CL後藤隆徳（32）毛利哲也（46）

『とりくみ』

1、79年総会で冬山合宿を仙丈岳周辺で行うことを決定した。

2、10月杉山　達、小川広太郎計画書作成した。

3、11月2日～3日に後藤、毛利地蔵尾根の偵察と荷上げを行う。

4、12月9日～10日に後藤、毛利、杉山、榊原、土佐は富士山吉田大沢で雪上訓練を行った。

5、12月30日杉澤、杉澤好子は車で後藤、毛利のサポートを行った。

12月30日（晴）

〈タイム〉下土狩8：00～甲府10：00～一の瀬13：00～林道終点14：00（泊）

毛利と納米里の森永牛乳の前で8時に待合わせた。回送役の杉澤も2人でやってきた。毛利は開口一番コツヘルを工場に忘れてきたと告げる。毛利は工場から東名、御殿場と行くので御坂峠で待合わせる。合流し竹宇に向かう。駐車場に私のチェリーを置いて行く。今度は杉澤のサニーで杖突峠に向かう。峠を越え高速を通過し美和湖を過ぎ三峰川を遡り小1時間で桃ノ木部落に着く。そこから林道は左手に北上し田城原に向かう。チェーンを巻きグングン登ると途中の人工湖にアベックが遊んでいた。林道の終点標高1800mに着いた。荷物を降ろすと車も帰る。途中まで歩いて見送る。車は一旦山陰で見えなくなったが、2人は車から降りて最後に手を振ってくれた。杉澤は体調不良で不参加だが残念だったろう。

そして私達は2人になった。何か急に淋しくなったが、アラスカの氷河にセスナで送り届けられた時もきっとこんな感じだろう。林道終点に戻り荷物を整理してテントを張る。夕食は牛肉をバンバン食べる。酒も2人でダルマ1本。良く食べ、飲み、語り早めに眠る。少し暖かいのが気になった。

12月31日（曇のち風雪）

〈タイム〉起床3：00～出発6：00ーデポ地点11：00ー仙丈岳15：00ー北沢峠17：00（泊）

昨夜は暖かく良く休めた。ただ、ちょっと頭が重たかったのはオールドが空になったせいらしい。朝食を済ませ出発する。雪は踝位だった。気象庁のロボット測量所を過ぎた頃より不気味な雲が空全体に速い速度で流れ始めた。

松峰の途中にテントが1張あったので声を掛ける。単独の男だった。彼は昨日一ノ瀬から登ってきたと言った。僕達が入山した時、降りてきたタクシーがそのようだ。松峰を巻きコルに着くと、そこには意外にも松峰小屋が見えた。意外というのは秋の偵察の時どうしても見つからなかったからだ。林道終点から2時間なら昨日ここまで来たかったと思った。

9時になり北沢峠隊と交信を試みるが三島労山のは入感しなかった。荷上げ品の場所に着いたのは11時だった。ここは2400m。計画ではここで幕営になっている。荷上げ品を出しながら今後のことを相談する。天気は最悪で雪も降ってきた。

私はここで幕営したかったが、毛利はいつになく積極的で、「今日中に北沢峠に行き、皆と合流したい」と言う。しかし、ここからでは登り3時間、下り2時間の5時間は掛るだろう。天気が上り坂なら良いが、下り坂では考えてしまう。だが、私は毛利に反対はせず「とにかく森林限界まで行って様子を見てみましょう」と告げた。

岳樺の中を深いラッセルで進むと2600m付近の森林限界に達した。これから先は岩と氷の世界である。もう一度毛利に「行きますか」と問いかける。私も止めようと決断が出来なかった。こういう中途半端な行動は危険だった。結局迷ったが行く事をきめた。もう引き返す事は出来ない。絶対に北沢峠まで行くのだ。

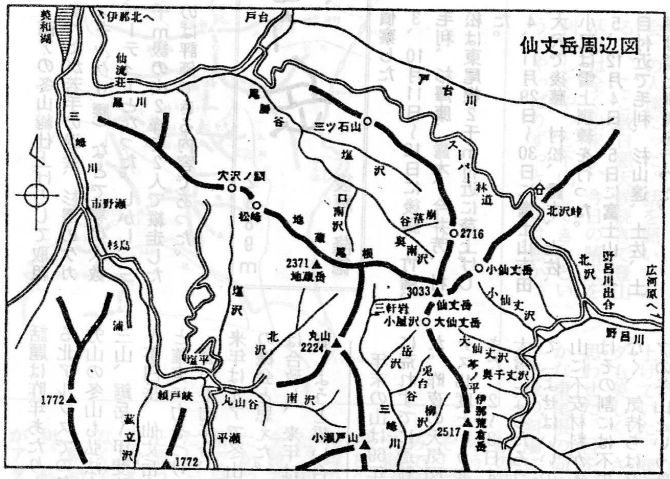
時計は13時を指していた。時間的にはギリギリであった。あと30分も遅ければここに留まったであろう。岩稜に出ると猛烈な風が吹きまくってくる。時々体が浮き風に持っていかれそうになる。1時間程登った。顔にビシビシ当たる風雪が痛かった。毛利がやや遅れ気味になり私は時々立ち止まって待つ。時計は14時を回りあたりは

も2人でやってきた。毛利は開口一番コツヘルを工場に忘れてきた

何となく薄暗くなってきた。少しあせってくる。大きなケルンの所で座って休む。2人共疲れ果てていた。毛利の長い睫毛にまた氷が光っていた。少し行くと傾斜もゆるくなり頂上の標識が見えた。頂上で堅い握手。苦闘の末勝ち取った頂だった。ふと、その時私は熱いものが込み上げてきた・・・。一体何なのだろう・・・。毛利の事を思うとヤケに泣けてきた。この年令でひたむきに山に登る毛利、私を信じてどこまでも一緒に登る毛利、絶対弱音を吐かない毛利・・・。私もいろいろ教えられる事が多かった。そんな事を考えたら急に泣けてきた訳だ。久し振りに冬山らしい冬山だったと2人で笑った。

これは後になって分かった事だが、この日北沢峠隊の今井らは小仙丈で引返した。また、まだ労山に入会していなかった鈴木真理子（現・伊藤）も友人と2人で嵐をついて12時頃頂上に立ったそうだ。そして何と故川口君もこの日頂上よりやや南側の台地に幕営していたそうである）

頂上を辞す。北沢峠隊と交信を試みるが駄目だった。機械が故障していたようだ。小仙丈尾根の下降は神経を使った。暗くなってきたうえ、ホワイトアウトでトレールが分からない。所々にある赤布を目を凝らして捜す。何度かルートを外したが何とか森林限界に逃げ込んだ。ピッタリ風がなくなる。ドカッと座り大休止。安堵感が広がる。時計は17時を回っていた。



食べる。酒も2人でダルマ1本。良く食べ、飲み、語り早めに眠る。

荷上げ品を出しながら今後のことを相談する。天気は最悪で雪も気味になり私は時々立ち止まって待つ。時計は14時を回りあたりはもう1度北沢峠隊を呼ぶがやはり出なかった。完全に暗くなったのでランプを出し下降。大声でエーデルワイスを唄いながら行く。

待望の北沢峠の明かりが見えた。テント村で「三島労山の竹端さん」と言って回るがどこからも返事はなかった。30分位捜したが、私達もメチャメャに疲れていたので、それ以上はやめた。私達は甲斐駒の登り口付近に幕営。毛利は小屋にビールを買いに行く。ビールは無かったので日本酒を買って来た。日本酒はうまかった。次第に元気も出てくる。

夕食は牛肉のシャブシャブで大きな肉塊からナイフで薄く切り取って口に入れる。酒をグイグイ飲みながらだといくらでも腹に入った。2人だけの冬山だったが、それなりに楽しかった。20時頃寝る。今日は大晦日。今年も山で終わり、また山で始まる。

毛利ともこんな風に4年経った。来年は是非北アに行こうと話す。今が潮時である。外はいつしか雪も止み、流れる雲間から月が見え隠れしていた。

1月1日（晴）

〈タイム〉起床3：00～出発5：00－甲斐駒11：00－竹宇16：00～三島20：00

甲斐駒の道は良く踏まれていた。私も毛利も疲れが少し残っていた。北沢峠隊の件は「（合流出来なかったのは）仕方がない」との結論だった。それにしても装備は出発前に良く点検しないといけない。天気は最高で快晴無風。ただ雲海が広がっているので下界は良くなさそう。5合目付近で初日の出を拝む。毛利が写真を盛んに撮る。鳳凰と富士を入れたものは後に三島市展で「入選」をした。

7合目付近で再び呼ぶが依然として交信不能。だが、川崎労山隊と交信出来たので事情を説明し、伝言を依頼する。甲斐駒にはいいペースで着いた。頂上は人も多く

ゴミもあり味気ない。早々と黒戸尾根を下り、その日の内に三島に帰った。

（文中敬称略）

（81年8月　日発行機関誌「くろゆり」第7号に収録）

解説

第8期冬山合宿

鹿島槍ケ岳

2889m

後藤　隆徳

南アの冬山総仕上げとして取組まれたが若手の退会、杉澤のケガ（ギックリ腰）などで最小人数パーティーとなった。しかし、三千m級の山2峰を2人で縦走したのは評価できる内容であった。

●鹿島山荘～爺ケ岳東尾根～爺ケ岳～鹿島槍ケ岳～鹿島山荘

▽80年12月29日～81年1月1日

▽CL後藤隆徳（33）SL竹端節次（42）食料毛利哲也（47）食料杉澤康秀（31）気象土屋友茂（30）会計霧木廣幸（31）装備村松正広（20）装備土佐　昇（33）医療小沢恵子（23）

『とりくみ』

南アルプスの課題は昨年で全て終了しいよいよ本年より待望の北アルプス後立山連峰の3ケ年計画、すなわち鹿島槍ケ岳、白馬岳、五竜岳が始まった。

1、80年3月総会にて決定。

2、5月2日～5日に後藤、毛利、竹端、土佐、村松、伊藤（鈴木）真理子は爺ケ竹東尾根～鹿島槍を偵察した。

3、10月11日～12日に後藤、竹端、毛利、杉澤康、露木、今井芳、村松は東尾根2千m付近に荷上げした。

4、11月29日～30日に富士山吉田大沢で後藤、村松、露木、土佐、小沢は雪上訓練を行った。

5、12月4日～5日に富士山5合目付近で毛利、杉山達、土佐、土屋は雪上訓練を行った。

12月29日（晴）

〈タイム〉三島8：05～爺ケ岳スキー場17：45～出発18：30～鹿島山荘19：10（泊）

昨年毛利と仙丈岳東尾根を登った時、いつでもそうだが翌年の冬山についていろいろと話合った。話題は昨年あたりからいわれている北アルプスでの冬山合宿だった。労山の冬山も弘法小屋尾根～白峰三山、鋸岳～甲斐駒、聖岳東尾根～茶臼岳、仙丈岳東尾根～甲斐駒と確実に力をつけてきている。

会の平均年令、機運等考えると来年は北アで冬山合宿をやる最良の機会と思えた。私と毛利の意見は合致し、来年は北アで冬山を実施しようと誓い合った。

年末の山は69年来の大雪で荒れに荒れすでに遭難者が続出していた。昨夜の天気図も大陸からマイナス45度という寒気団が南下してきた。2～3日すれば北アはまた大雪になるだろう。家族は心配して「よせばいいのに」といった。山に不安材料が多かった。だが私はその割には不思議と心に動揺もなく、気持ちは充実していた。北アの冬山という新鮮さもあったが、何よりも8名の大勢の仲間と合宿が出来ることがそうさせていた。

三島駅発は7時半だったが竹端、土佐が遅れ8時5分になる。使用車は毛利のブルーバードと私が沼津の鈴木氏に借りた人形劇団の「ぶくぶく号」だった。今年はこの車を良く借りた。見送りは今井芳、杉澤好らが来てくれた。車が池田町を過ぎ大町に入ると雪は一段と多くなり約1m。近くのガソリンスタンドの屋根が雪の重みで落ち、久し振りの大雪を物語っていた。それに道路の除雪が充分でないので対向車が来ると交換に苦労し時間も掛かった。中花見を過ぎ、鹿島川を渡り、爺ケ岳スキー場に来るともう回りは暗くなった。しかも、この辺りの雪は全く締ってなく車はしばしば雪の中に入ってしまった。そのたびに私達は車の後押しをしなければならなかった。

スキー場の雪は約2mでその先は除雪してなかった。暗い中、荷物を整理し分担しランプをつけて出発。鹿島山荘には小1時間で着く。明日のルートを偵察すると、深い雪のなかハッキリとトレースはついていた。山荘の人の話だとすでに数パーティ入山しているとのことだった。山荘に戻り全員で囲炉裏を囲んで軽い食事をとり酒を飲む。竹端がその昔鹿島槍で遭難しここまで走って連絡に来たとか、山荘のバアさんの話などを聞いた。最後に明日の打合せをして休む。フトンが冷たくて快適でなかった。

12月30日（晴）

〈タイム〉起床3：00～出発6：

る。雪が多いので樹木が埋まり以前の印象と違って見える。爺ケ岳

たのだった。

東尾根は相変わらず歩き易く、

人は爺のみと決定した。夕食後は酒も入り全員最高にノリまくり夜